

# 汲古一紙

— 講演より —  
『書はどういう芸術か』(三)

中村素堂

人間がおのおの感じたものを、いろいろな表現手段を借りて不定多数の人、誰にでも訴えてみたい。細君にだけ訴えてみたいというのも芸術でないことはないが、大抵の場合は特定の人を予想しないところに、芸術の高い意義がある。君と僕と手を握ったらある感情が流通した、好きになったというのは芸術ではない。芸術のようにう人があるが、似ているが芸術じゃない。すなわち多数の人に向かって、時間空間を超えて訴え得るもの、それが芸術の定義じゃないかと思うのです。

## 二 書はどういう芸術か

そこで私どもは、書の世界の人間ですから、書道の話に入りますが、書道はまさしく造形の美術です。美術の一ジャンルです。けれども他の美術と非常に違うところがある。それは絵画とか彫刻のような具象性がない。たとえば花とか魚とか馬とかいえば、大抵の美術部門のなかではかなり抽象化したものでも、何かモデルになる自然があるんです。そういうものによって、花なら花、馬なら馬といったものがとらえられる。ところが書にはそういう具象性は全然ない。山が山の恰好をしているのは古代の字で、今の字はそういうことはない。いわんや草書の字になると、そういうことは全然ない。彫刻でも何でも具象性がある。その証拠に絵の方には第一色彩がそれから形がある。すなわち形と色がある、そのほかの芸術で音のあるものもある。その音も音の中で自然に合う、自然に接する感覚に共通しそうな音を、どこかで捉えようとしている。ところが書には、他の芸術にみられるような具象性がひとつもない。すなわち書は最初から抽象芸術です。これは書をやるものとして、ぜひ憶えておかなければならない。書の内容のなかで、よく何と読むかわからない、足の裏に墨をつけて歩いてみる。チューブで黒い墨をしばらく出して刷毛でこすってみる。それを抽象芸術だといっている人がいるが、あの理論はおかしい。書はそんなことをしなくても最初から抽象で、これを馬としよう、鳥としよう、

う、流れということにしようという約束だけで、一応そういう字を媒体にして連想できるだけです。何も無理に墨だけ塗ってみたりしなくてもいい。もちろんそういうものも、新しいジャンルが生まれるためのひとつのあり方として、結構なのですが、それだけが抽象であるとおかしい。書においていわゆる象形文字を書いている時には、甲骨文とか大篆の時には、具象性のある芸術であるということもできますが、それから派生してしまった今日は、全然新しく抽象芸術だと考えるべきじゃないでしょうか。

ここまで話してくれば、その意味は大体おわかりになるだろうと思うのですが、そこで音楽とか演劇とかは、鑑賞者の視覚・聴覚に訴える非常に他動的な面がありますが、美術である絵画・彫刻などは、他動的ではないということです。絵の中でムーヴマンという言葉があります。全体の中でひとつの動きのリズムが感ぜられるような絵ですが、書でもムーヴマンということを非常に主張される人がある。草書などに対してわれわれもムーヴマンといったものを感じるものもあります。原則的には書にはムーヴマンのないのがむしろ本来の姿だと思ふ。王羲之の書がいかにもうまいといつてもムーヴマンなどは全然ありません。十七帖をみて動くかと思つたなんていう人がいたらどうかしている。どんな有名な名家のものでも、古典の中でムーヴマンと考えられるものはありません。こんなことは余談ですがとにかく美術の方のジャンルに入るものはみな他動性はないということ。ただ書はそういう点において少し違う。この書と類似性のあるものを今まで述べてきた外の芸術に求めると書は最も音楽と類似している。外のどれとも類似していません。音楽の中に描写音楽というのが。時計のセカンドの音がしたり、鳥の鳴く声を出したりするのは描写音楽です。これを除いてしまえば音楽は大体抽象的です。われわれはその音によって悲しさを誘い出される、楽しいものを誘い出されるけれども、楽しい時にはドンドン、悲しい時はキーコキーコなどと決まっているわけではない。何となくそれによって悲しい感じを誘い出されるだけで抽象性という点において非常に書に似ている。

(つづく)